

研究・調査報告書

報告書番号	担当
398	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol-attributable fraction for injury in the U.S. general population: data from the 2005 National Alcohol Survey. 合衆国一般集団において外傷におよぼすアルコールの寄与割合：2005年全国アルコール調査のデータより	
執筆者	
Cherpitel CJ, Ye Y	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Stud Alcohol Drugs. 2008 Jul;69(4):535-8.	
キーワード	
外傷 全米アルコール調査 一般集団 寄与危険割合	
要 旨	
<p>目的： 救急外来患者を対象にした研究では、アルコールと外傷との強い関連が記述されているが、このような患者対象は、より一般的な集団を代表しているとは必ずしもいいがたい。救急外来の以外でのアルコールと外傷のリスクとの関連についてはあまり明らかにされていない。</p> <p>方法： 2005年全国アルコール調査に応諾者のうち、過去一年間の外傷を報告した1,149名(18.5%、加重計算)の外傷前の飲酒状況を分析した。外傷の治療型ごとに分析を行った(救急外来にて治療29.2%、その他の施設にて治療47.8%、治療せず22.9%)。</p> <p>結果： ケース・クロスオーバー分析によると、飲酒による外傷の相対リスクは救急外来治療例 1.85 ($p<0.01$)、その他施設治療例 1.42 (有意差なし)、非治療例 1.43 (有意差なし)であった。この相対危険度に基づくアルコール寄与危険割合は、救急外来治療例 2.96%、その他施設治療例 1.59%、非治療例 1.89%であった。外傷をこうむった本人自身が外傷発生に飲酒が関与していると考えた主観的評価による寄与割合は、救急外来治療例 3.06%、その他施設治療例 1.61%、非治療例 1.47%であった。ケース・クロスオーバー分析から算出された寄与危険割合と主観的評価による寄与割合との間に大きな違いは認められなかったが、いずれにしろ算出された推定値は救急外来患者のみを対象にした既存研究にくらべ非常に小さい値であった。</p> <p>結論： 本研究結果より、救急外来を訪れた外傷例においては、その他の施設での治療例あるいは非治療例よりもアルコールの及ぼす影響が大きいと考えられた。このことは外傷の重傷度とも関連している可能性がある。一般集団において、外傷に及ぼすアルコールの寄与危険割合をバイアスなく推定するためには、外傷発症前のアルコール暴露の強度や、外傷の発生から面接調査までの時間的隔たりによる思い出しバイアスをも考慮したさらなる調査・研究が必要である。</p>	